

## ジャン＝バティスト・デュボスの生涯と思想

五十嵐 嘉 晴

18世紀の初頭に美学の新しい方向を示したジャン＝バティスト・デュボス (Jean-Baptiste DuBos) の伝記としては、全般的に良く調査されたものでは、A. モレルの『デュボス神父に関する研究』(1850年刊)<sup>(1)</sup>が最初であり、一層詳細で正確で深められたA. ロンバールの『デュボス神父——近代思想の先達』(1913年刊)<sup>(2)</sup>を越え出るものは未だ出版されていない。ロンバール以後、デュボスの美学については諸考究が行なわれているが、生涯に関しては、さらに究明されるべき個所を残しながら現在に至っている。今後は、ロンバールが掲げた資料・文献などを手がかりとして一層の調査が期待され、特にトルウスユール (Troussures) 家所蔵のデュボスの手紙・手記などが重要な情報源であろう。本稿はこの期待に答えるものでもなく、またロンバールの研究を越えるものでもない事は残念であるが、デュボスの生涯と意識・思想、特に美意識との結びつきに照明を当て、要点を整理すると共に、一層進められる検討はデュボス美学研究の各所論にゆずりながらも、この点での将来における究明に関しての一視角を提出する事を目的としている。

☆ ☆ ☆

ジャン＝バティスト・デュボスは、1670年12月21日に、北フランスのボーヴェーに生れた。デュボスという名の家族は300年以前からボーヴェーの町の記録に出ているが、我々のデュボスの直接の祖先であるかどうかは解らない。しかし、祖父と父が、当地で商人で役人(échevin)にもなっていた事は知られている。母は、地主で裁判所の役人の家から嫁いで来た。伯母は、この町の市長夫人となっている。デュボスには三人の姉と一人の妹、パリに出て市庁の会計官吏となった兄一人があり、6人の子供の内第5番目が我々の美学者なのである。これら近親との関係の心理学的考察は資料不足で出来ていな

いが、外面的には、兄弟などに対して親愛の情が表わされている事はなく、有能だが孤立した子供であったろうと推測されるだけである。デュボスの兄姉妹には知識人となった者は居ないが、伯父に、有名な文学者サン＝テヴルモン (Saint-Evremond) の友人で英国やイタリアを旅行した学殖豊かな神父サンティレール (Foy de Saint-Hilaire) が居たし、高名な考古学者フォワ＝ヴァイヤン (Foy-Vaillant) やゴードゥワン (Gaudoin) 神父も親戚であった。

ボーヴェー出身の当時名高い学者として、教会参事会員 (chanoine) のエティエンヌ (Etienne) や哲学者バイエ (Baillet) がおり、デュボスはこれらの人々にも近づきがあったと思われる。

1686年に、彼は生れた町を後にしてパリに勉学に出て、1692年1月にソルボンヌで神学の学位 (bachelier en théologie) を取った。学校での勉強について、彼は「老ぼれ学者の屁理屈」と評してもいる<sup>(3)</sup>。この言葉が、ソルボンヌの学問に対する彼の全評価をなすものでは無いであろうが、そこには、批判精神を持った若者の態度の一面があらわれている。20才代中頃の彼の手紙や生活を調べて、デュボス研究の第一人者ロンバールは、「深さより生氣のある、真に批判的よりはいたづらっぽい精神」や「ブルジョワ精神が好む冗談」を見い出している<sup>(4)</sup>。彼のこうした気性は、後になっても、時々見受けられる。<sup>(5)</sup>

この時期には、市民の上層部と貴族との間の分離はそれほど厳しくもなかったし、18世紀の中頃程深刻にもなっていなかったといわれている<sup>(6)</sup>。そしてデュボスについては、「要職が生まれによって与えられる人々の内では無かったが、ルイ14世の御代で、要職を渴望しチャンスと努力によってそこに至る事が禁じられていた人々の内でも無かった」といわれている<sup>(7)</sup>。た

しかに、彼の家系からしても、高い学問を修めれば、やがて高等法院に入り、進んで“法服貴族 (noblesse de robe)”の一員に成る事は可能であった。彼の妹は、「彼の野心は、良家の子弟として最も清廉で安らかな地位である教会参事会員になる事であった」と断じている<sup>(8)</sup>。しかしこの言は、彼女がデュボスの遺産相続訴訟の中で、自分の利益を主張するため述べられたものなので、もっと活動的であったデュボスの実生活と合致していない。デュボスの未来図は、禄づきで快適で敬虔な生活の展望に限られては居なかった筈である。<sup>(9)</sup>

☆ ☆ ☆

1693年(22才)には文識ある紳士となっていて、以前から出入していた言語学者メナージュ(Ménage)のサロンで学者間に友人も出来、『メナージュ追悼集(Menagiana)』には執筆している。その文は、上手な機智、面白くそしてかなり不謹慎な洒落などで、光った文体を見せている<sup>(10)</sup>。この頃より彼の知り合った知識人には、哲学者マルブランシュ(Malebranche) 東洋学者 ガラン(Galland)、学問・文芸情報家で“パルナスの配達人”と称されるニケーズ(Nicaise) 神父、Ch. ペロー、古代近代論争においてペローの対立者ロンジュピエール(Longepierre)、同じく対立者の詩人ボワロー、その他に、文芸家サン＝ピエール(Saint-Pierre) 神父、考古学者ノリ(Noris) 神父、アヴランシュの司教で碩学ユエ(Huet)、といったアカデミー・フランセーズや文芸・碑文学アカデミー(Académie des inscriptions)のメンバー達が居た。彼等程高名でない研究者・友人も当然デュボスと交った。これらの人々との思想関連については、未だ十分な研究はなされていないが、文芸・碑文学アカデミーには、すこし後になって、理神論者や無神論者が増えるので、このような思想もデュボスにとって無関係のものでは無かった筈である<sup>(11)</sup>。当時の権威に接近していると共に、新しい思潮が彼に親しみのあるものとなっていたのである。彼は、議論される問題の全ての側面を知って、公平か中立的な立場に立ち得たのである。古代近代論争に

おいても、諸宗派間の論議についても、無神論と独断論的カトリックに対しても、常に一定の距離をおいて振舞っている。

彼の知己には、ルイ14世の典医ブルドロ(Pierre Bourdelot)があったし、摂政オルレアン公フィリップが最も上手な眼医者といったジャンドロン(Claude Deshayes-Gendron)も見える。デュボスは、彼等から人間の生理学的説明を聞く事もあったろうと思われ、後の彼の美学における一特色は芸術家の生理学的分析にある事を考えれば、この関係はさらに立入った検討が望まれる所である。また当時の医学からは、神秘学的(occulte)な残滓が完全には取り払われてはいなかった<sup>(12)</sup>、外界と精神との結びつきを認める事はむしろ当然であり、デュボスの美学に見られる風土論的決定論は近代化された形で提示されているが、その源泉には、この点での常識的認識と共に錬金術、占星学、医学なども加えて探求しなければならぬであろう。

科学と自然の力に関心を持った若きデュボスは、高等法院長ビニヨン(Bignon)家で、磁石についての研究発表を行った。彼はまた、地中海の季節風の原因について論じたり、化石に興味を示した。このような我々の学者の精神性には、『法の精神』を書く以前に、医学や諸科学の研究に熱中したモンテスキューの形成と共通するものがある。しかし、磁針に関心を示す人は、一面においては、物質の神秘主義的特質に思いをめぐらす人と接近する所もあり、他面においては、そこに風への考察が交じれば、貿易商業の関心とも通じる所がある。ブルジョワの家柄のデュボスは、その後も商業と技術革新に対する配慮を持ちつづけた。この時期のブルジョワが、一定の合理主義を進める中で、デュボスも、ジャック・エイマール(Jacques Aymar)という狐狗狸さんの魔法の杖に興味を持って追及しているが、信じる事はなかった<sup>(13)</sup>。また、奇蹟、占星学、錬金術に対しても、デュボスはきちっと否定的である<sup>(14)</sup>。彼の実証主義的精神は、この種の神秘を“科学的”に解明しようとするものであるが、だからといって、そ

の実証主義から神秘主義が完全に拭い取られているかどうかは、いつか究明されるべき課題であろう。化石については、この時代には、ノアの世の大洪水の証しという説もあったし、すこし後に“科学的”に説明される場合にも、地下水脈によって海から山上に運ばれた物であるとか、ヴォルテールは巡礼者が落していった物であると考えたのであった<sup>(15)</sup>。化石は骨董室にコレクションされ、美術作品を売る商人の家で販売されていた。化石を求めて、デュボスは、科学と骨董と美術の世界に入っているのである。

☆ ☆ ☆

若いデュボスは、何度か失敗を犯した。その一つは、ボーヴェーで出土した《髯のあるメルクリウス像》の碑文を解読するのに、幾つかの文字や点を移行したり無いものとした事である。これは明らかな誤ちでしかないが、さらにこの碑文自体が、その固有名詞の奇妙さや字体から偽造である事が今日では判明している<sup>(16)</sup>。

この解読をした同じ1695年に、彼は『貨幣によって証明された四人のゴルディアヌスの歴史』という題の論文を発表した。デュボスは、この中で、ローマ皇帝である第四人目のゴルディアヌスの存在を証明しようとし、古代の貨幣やメダルの検討に援助を求めた。古銭は、ロンバルのいう様に、後のポンペイ遺跡の如く、見て触れることの出来る生きた古代であり<sup>(17)</sup>、それに基く実証的な態度は、歴史研究の伝統的な方法論を一般的に云えば超え出る新しさがあった。また、「貨幣の美術的な美しさは、学校での学問が持たないところのエレガンスを与えるものである」とも云える<sup>(18)</sup>。しかし、古銭学も考古学も、この時代にすでにかなり広く行なわれているので、デュボスの方法の新鮮さを誇張する事は出来ない。また例えば、すこし以前に、ルブランはアレクサンドロス大王の顔を古銭に基いて描いたし、プツサンもエジプト風景を、古代モザイクにあらわされたそれを利用して描いている。古銭のコレクションは貴族や富裕な愛好家の家に多く見られた。デュボスの考古学的と美的な情熱は、こうした収集家の熱に

も近いものであり、後に彼が著す芸術論の中には、次の様な一節があり、この種の彼の精神性の一端を示している。「一片の貝殻、一輪の花、時が文字と形姿の幻影しか残してない一枚の古銭は、激しいそして気を揉ませる情念を、即ちそれを見たい欲望とそれを所有したい羨望を駆り立てる<sup>(19)</sup>。」

ところで我々の若き碩学は、上記の論文において、第四人目のゴルディアヌスを捻出するため、自分の推論に有利な古銭を提示したが、その論拠を否定するコインは知らなかったか、無視した<sup>(20)</sup>。その上、彼は、この事に関係あるギリシャ語の資料文献に、写本した人の綴りの間違いがあると推定しているが、もしこの仮定を通せば、他の幾つかの語も、そして文節全体をすら訂正しなければならない事となる<sup>(21)</sup>。当時の権威ある学者は、第四のゴルディアヌスを想定するのは無謀であると考えていた<sup>(22)</sup>。しかしながらデュボスは、その忠告を聞かずに、この研究をあえて出版した。何人かの賛同者も出たが、大多数は反論し、2年後には、あるオランダの学者によって、デュボスの主張は完全に崩された。でも彼は、自分の間違いを認めなかった。この論文は、その誤ちにも拘らず、デュボスの名を広めるのに役立ち、それ以後に、彼がフランスや外国の上流社会に、有能な古銭学者として入って行く力にもなった。とはいえ、彼はこの向う見ずな仕方から、ひそかに教訓を引き出していたであろう。彼が後にその芸術論の中で、若年の作家に慎重さを説いている時や<sup>(23)</sup>、新しい方法で『ルイ14世の御代』を書く事を企てた野心あるヴォルテールに慎重さを忠告している時<sup>(24)</sup>、この事が思い出される。

☆ ☆ ☆

彼の『四人のゴルディアヌスの歴史』は、次の言辞の様に“科学的”挑戦をもって始っている。「物理学者、天文学者、幾何学者達が、ある意見を、前代未聞で新しいからといって非難するのは正当であり得ないと同様に、考古学者もある判断に対して、それは新しい、それはどんな本にも書いて無いという理由で反対すべき

ではない。真理は永遠なるものであるが、人間は真理が一旦にあらわされるに値しない。真理を人間に隠す闇を、時間と研究が徐々に払って行かねばならない。理性が真理を人間に、ほとんど気にそぐわなくても理解させねばならないし、人間の先入見といままで無知と間違いの中に居たという事を認める恥とに打勝つため、理性が全ての力を発揮するべきである<sup>(25)</sup>。」そして、慇懃な調子で次の様に終わっている。「私は自分の見解を（中略）問題の解明として示すのではない。（中略）私はただ、自分の説が、一般の見解よりは大変に蓋然性があると信じて居るのである<sup>(26)</sup>。」この様にデュボスは、永遠なるものとして神に属す真理を理性の力で開示して行こうとする合理主義的進歩性を持っている。また同時に、自分の信念は曲げぬとはいえ、科学的誠実さなしいしは紳士性によって、ドグマ主義や権威主義や体系的定式化を嫌っている。ロンバルは上の末尾の言葉を評して、「我々の若き作家は、自分自身の考えさえ、あまり重大に考えようとしなない振りをしている」といっている<sup>(27)</sup>。たしかに、実証主義的方法を用いるデュボスには、キリスト教に敬意を表しながらも、キリストの教えも異教もほゞ同列に扱う時など、懐疑主義的色彩が時々見受けられる。デュボスの実証主義に関しては、科学的丁寧さを具えた「最も根気ある考証学的学殖」が、この論文でも、後の『フランス君主制の成立の批判的歴史』という大研究においてと同じ様に、「推量的方法の特異な誤用」と相まっている<sup>(28)</sup>。彼の芸術論に於ける実証主義についても、この点の考察がいつか行なわれるべきであろう。

☆ ☆ ☆

ところで我々の青年は、『四人のゴルディアスの歴史』の中で、『皇帝史』の著者である敬まらすべき権威ルナン＝ド＝ティルモン Le Nain de Tillemont) に反駁を加えているが、この伝統墨守の歴史家がデュボスの気に障るのは、その歴史学に見られる説教師のモラリストの体質の故である<sup>(29)</sup>。こうした我々の神父は、『神託の歴史』を書いた進歩的文化人フォント

ネルと同じ様に、カトリックなり古代の宗教なり信仰心には敬意を表しながらも、神秘主義的あるいはキリスト教弁証論的な歴史解釈は排除しようとしているのである。この視点からは、デュボスが、進歩的哲学者でオランダに亡命していたベイル (Pierre Bayle) の交信者の一人であり、後に彼に会っている事が注目される。デュボスは、フランスでの文芸・学問・社会などについて知的関心の対象の全ての情報をベイルに提供し、かの『批判的歴史辞典』の幾つかの項目は、デュボスのもたらした資料によっているのである<sup>(30)</sup>。デュボスはヴォルテール程の批判精神の鋭さを持つ事は無かったが、ベイルの批判的・懐疑的・相対主義的・歴史主義的な態度が親しいものであった事には留意しておく必要がある。

新しい思想の持主との交流では、我々の神父がジョン・ロックと文通していたし、イギリスで会っている事を忘れてはならない。しかし、その手紙の話題は、主として旅行記や植民地探検家の話であって、哲学や政治の事柄ではない<sup>(31)</sup>。ただ、『人間悟性論』の仏訳が出る時には、ロックはその校正刷りをデュボスに送って検査を求めている。デュボスは、ロックの経験論に触れた最初のフランス人の一人なのである<sup>(32)</sup>。さらには、デュボスに対するロックの影響はあまりにも著しく、デュボスの美論の中で特定の参照個所によってそれを証明するには、あまりにも一般的で、あまりにも遍在していると云う人も居る<sup>(33)</sup>。また、「感覚論が、デュボスの青年期の功利主義的実証主義と見事に合致していた」とも指摘されている<sup>(34)</sup>。ここで云う実証主義 (Positivisme) は、経験事実証拠に即しての解釈と共に、肯定性 (Positivité) の重視の精神性をも含蓄するものと解されるであろう。

デュボスをロックに紹介したのは、博学なトワイナル (Thoynard) 神父であった。彼は植民地会社の株も持っていた商業的な野心ある人物であった<sup>(34)</sup>。彼はまた、新式小銃や二つの竜骨を持った船や海水を脱塩する製法などを発明したり、サント＝ドミンゴでの煙草の開発

に関する意見書を大臣に提出したりした。そして彼は、デュボスに商業上の色々な仲介を頼んだり、一緒にボーヴェー市の富くじに賭けたり、砂糖の取引を研究したり、船の設計図を作って、これは我々の神父がオランダのインド会社の長官に提出した。デュボスは、技術の発展、文明の物質的恩恵の増大、生活を快適にするもの、一定の奢侈の享受、を望んでいる。それは、社会発展への深い洞察からと云うよりは、一般的な向上の意識と商工業の進展への気持に基くものであり、この精神状態から来る楽天主義は、社会的貧困とか社会的軋轢など否定的なものを注視する眼は持たせない<sup>(35)</sup>。

☆ ☆ ☆

1698年から1701年の間に、デュボスは、オランダ、イギリス、イタリアに行った。彼はこれらの国で、多くの有名な哲学者、歴史家、文学者、探検家など多様な専門家に会っているが、その詳細については、ロンバルの調査に譲る事とする<sup>(36)</sup>。ただ、ポール・アザール Paul Hazard が17世紀末から18世紀の始めの『ヨーロッパの意識の危機』の発動者として取り上げている人々の大部分に、我々の神父が会っている事に、特に留意すべきであろう。<sup>(37)</sup>

ところで旅行は、相対主義的観点を養うと云われている<sup>(38)</sup>。デュボスは、フランスとは異った風俗、芸術、自由な気分のある政治形態、尊敬すべき新教徒達などを見る機会を持ったのである。18世紀に、デュボスについて演説をした人は、「旅行は彼の研究計画の中に入っていたし、研究の続きにすぎないのであった」と云っている<sup>(39)</sup>。デュボス自身は、後に芸術論の中で、「私が外国民を親しく訪ねてその気持を学んでも、それは自分の国の気持を放棄せずである」と云っている<sup>(40)</sup>。

しかし彼の旅行の動機は、研究のため、旅行者として「*レピブルク・デ・レトル*」(République des Lettres)の人々と会う事に限られては居なかった様である。裕富ではないデュボスが、出費の多い一連の旅行を行うには、確かに彼の伯父が援助金を出してはいるし、<sup>(41)</sup>また証明は出来ないが、誰かが何らかの商業上の用事を彼に

託して出資している事も考えられる。ところが、18世紀のモレリ (Maréri) の辞典には、「彼は密事を帯びてイギリスに渡った」とある<sup>(42)</sup>。我々の神父はスパイであったかもしれないのであり、幾つもの状況がこの仮説をかなり確実度の高いものとしている<sup>(43)</sup>。この点での詳細にもここでは立入らぬが、ともかく彼は、少し以前に美術理論家ロジエー・ド＝ピール (Roger de Piles) がスパイ容疑で異国で入獄した様な不幸は避ける事が出来た<sup>(44)</sup>。

☆ ☆ ☆

スペイン王位継承問題でヨーロッパが紛糾している時、デュボスは、この問題で重要な人物の一人であるバイエルン選帝候のもとに、そのコレクションの分類のために、古銭学者として入り、1704年にはこの君主の命により、『バイエルン選帝候の声明書』なるものを執筆した。デュボスは選帝候の動向も知り得たし、政治にも通じていたのである。この事は、1703年に出版された『今時戦争に於て思い違ひされているイギリスの利益』と云う怪文書の検討によっても知られる。この書物は、外務省の指示により、我々の神父がある偽の英国人の名をもって書いた政治的謀略文書であって、当時、フランスとスペイン王に対して勢力圏を作っていた大同盟側、このフランスの敵の間に不信と不裂の種をまく事を目的としたものである。この著者は、イギリス人は戦争を続けるに何の得もないという事を説得しようとしている<sup>(45)</sup>。

あるスイスの評論家は、この論文に、「打破れぬ根拠と数学的論証」が見られると評した<sup>(46)</sup>。またトレヴー誌 (Journal de Trévoux) が<sup>(47)</sup>、この論文には英語特有の云まわしがあるとまで指適しているのは、デュボスがイギリスにも行った事があり、この国の諸事情の知識を深めている事のあらわれでもあろう。しかしながら良く見てみると、その論理には首尾一貫しない所がある。例えばデュボスは先ず、フランスとスペインの国勢は衰えているから英国人は恐れを持つ必要はないとしながら、次に英国を危ない戦争から回避させるために、仏・西の軍事的・経済的優位を証明するのである<sup>(48)</sup>。ある

いはまた、フランスに亡命している英国王子で王位継承主張者でルイ14世がジェームズ3世と認めるジェームズ・スチュワートが英国に帰ったら、前政府の借金は御破算にするであろうから、イギリスの金融家達に、もうその政府に金を借さぬ方が良くと忠告して、戦争の継続を不可能にしようとしているが、同時にイギリス人に、ジェームズ3世を呼び戻した方が彼等のためになるという事を理解させようともしているのである。しかし国に莫大な金を借している人が、この君主が借金を零にするのを恐れるのは当然であり、金を失って得をするという事を主張するのは無理がある(49)。皮肉な云い方をすれば、後にデュボスが芸術論で、「嘘をつかずして真実を偽造する技にすぐれる事」が重要だとしている事が思い合される。直接の関連もなく、次元も異るとは云え、真よりも技を重く見るところに、似かよった精神性が見られるのである。こうした「我々の神父の幻想は、しかしフランスの政治自身の幻想であった。とロンバルは云っている。(50)

とは云え、この論の中で、植民地問題について語る時には、デュボスに先見の明がみられる。それは、彼がアメリカの独立が不可避なる事を予言しているからである。(51)

この予言は、人道主義的な思想の一種に由来するものではなかった。だがデュボスにも、ブルジョワ的で世界市民的なヒューマンイズムの光はさして、次の様な態度にそれがあらわれている。すなわち彼は、「オランダ人を何にも益の無い昆虫の如き人種のうちに数え入れることが出来る」と云う事があっても、すぐ後に、「オランダ人は正義と善意の全ての規則を他の国民より以上に良く彼等の間で守っている…(中略)その行政司法官達は、公正と同じく優しさをもって国内を統治している」と云う(52)。確かにデュボスは新教徒を好みはしないし、亡命した新教徒を罵倒しさえしてカトリックの信心を擁護しているが(53)、もしオランダがカトリック教のフランドル地方の主となったらイタリア人に迫って来る危険を示そうとして、1705年に『バイエルン条約についての考察』という論

を書いた時にでも、寛容な新教徒の繁栄を公平に記述したり、彼等の経済発展の方法を高く評価する事を禁じ得なかった(54)。彼はこの他にも、幾つかの政治文書をあらわして、そこには、人口増大の必要性など社会経済問題、歴史、法学の詳しい研究の成果がみられる(55)。それらも、客観的であろうとする態度の上で書かれているが、しばしばその論旨に合わせて、実証的知識が特定の目的のためだけに歪めて用いられている事もある。それは、若く有能な学者が生活のためにか、上位の人々に使用された場合に良くある事でもあろう。

デュボスは、ユトレヒト条約に至る幾つかの条約会議に、ユクセル(Huxelles)元師の秘書として参加している。こうした外交活動は、他の使命や談判によって、1715年までは続いた。しかし外交官の経歴から高い地位に登ることもなかったし、彼を使った人達は十分な報酬を与えなかった様でもある。後に彼が芸術論の中で、偉方の気まぐれについて語ったり、公正なメセナの必要を強調しているのを読むと、この彼の体験が我々には思い出される(56)。

しかしルイ14世が逝って摂政時代(1715—1723)になると、友人のデュボワ(Dubois)が大臣となり、彼の後援によりデュボスの境遇は良くなっていった(57)。そして彼は、何度か、摂政オルレアン公フィリップや若年の国王や枢機卿となったデュボワのために働いた。こうしたデュボスの政治経歴について、ロンバルは、「彼の内に秩序と権威の観念を優勢にさせた」と云うと共に、「彼の政治的理想は、確立された秩序でも大変重じるのであるが、権威に対する気力ない服従にも、ボッシュエが考えていた様な神授権説にも基づいていない」と指摘している(58)。

☆ ☆ ☆

さて、詩人ジャン＝バティスト・ルソー(J.-B. Rousseau)とか、リュリイ(Lulli)の女婿で同じく音楽家のフランシーヌ(Francine)とか、高等法院の高官ラドヴォカ(Ladvozat)といった人々との交友からは、デュボスがオペラの大ファンであった事が知れる。舞台裏にも

常連であった彼は、女優のために歌詞を作ったり、オペラ批評を書いたりした。

王も摂政も気に入っていたオペラは、当時好遇を受けていた<sup>(59)</sup>。しかしながら一方、多くの文化人や宗教家がオペラを低級なジャンルのものと見なし軽蔑している。ボワロー、ラ＝ブリュイエール、サン＝テヴルモン等は、それを「音楽と舞踊と機械装置と装飾をつめこんだ愚行」と云う様な表現で見下していた<sup>(60)</sup>。1693年のソルボンヌの意見では、「オペラは、その音が心を動かす様に殊更に求められ按配された音楽を利用して、魂が情念に感じやすくなるからそれだけますます危険なものである」と批判している<sup>(61)</sup>。それに対して、古代近代論争に於ける近代人擁護論者達である ch. ペローやラモット (Houdart de la Motte) は、オペラの抒情性を弁護したし、またモンテスキューもその楽しみを認めている<sup>(62)</sup>。

こうした状況の中で、我々の神父の趣味の位置や意味は、その美学の中で「感情」の弁明論をする人にふさわしいものであると云えよう。また、オペラはデュボスに、芸術的形象、主題、自然らしさ、大衆性などについての諸考察を促したであろう。しかしこのオペラに情熱を燃やし、社交界の快を知り、賭け事の強い熱情と陶醉を知る事を後の芸術論で表明しているデュボスにも、ある感受性の欠如があると云われている。例えばロンバルは、「彼の母堂の死に関する書簡には、ある冷淡さがあらわれている：そしてジャンドロンはこの時に、デュボスに30才にして老人の心と感情を持っていると責めた」と述べている<sup>(63)</sup>。A. フォンテーヌ (André Fontaine) も、我々の神父の美的感性について語る時、それがあまりに褪せていると思ひ、デュボスには恐らく作品体験が欠けていたのではないかとまで誤った疑いをかけている<sup>(64)</sup>。たしかに彼はイタリーに行っても、その地の美術を良く調べても熱中はしなかった様であり、<sup>(65)</sup> イギリスの田舎で「美しい自然」に感心するが、その自然とは、立派な馬や羊や豚を指している<sup>(66)</sup>。彼が旅行中に眺めた風景も、美しさとしては彼の心に働きかけなかった

様であり、アルプスの山岳は彼にとっては不愉快な地であり、海は長い航海の退屈さとして映った<sup>(67)</sup>。日没の光景を眼の前にして、彼は気性物質の効果によるそのフィジックな説明を考えるのであった<sup>(68)</sup>。

こうした実利主義的な感性は、モンテスキューなどにも認められるもので<sup>(69)</sup>、それが当時の学者の一般的特性とは個人差もあって云えないにしても、そこには少くとも未だ自然に対するロマン主義的な感情は見られない。

### ☆ ☆ ☆

デュボワの力によってデュボスがアカデミー・フランセーズに入る事は難しく無くなっていったであろうが、そのためには何らかの一つの価値ある仕事が必要になっていったであろう<sup>(70)</sup>。恐らくこの目的とも関係があると思われるが、1719年にデュボスは、『詩と絵についての批判的省察』を出版した。二巻本のこの著作は、1733年に三巻本となり増補と項目順序組みかえを行って最終的な形となったが、初版本に較べて大きな内容の変化は見られない<sup>(71)</sup>。この論の分析や意味の検討については、本稿以外に譲る事として、以下の指摘だけに留めておく事とする。

### ☆ ☆ ☆

この本に関して、悪い文体だと云う人も、秩序のない編集だと云う人もいる<sup>(72)</sup>。ロンバルは、そこにアデイソンやシャフツベリーの著述と似たイギリス風閑談体を認めている<sup>(73)</sup>。しかしある人は、その序文に述べられた構成をたどる事が可能だと云うし、さらにそれ以上に厳密な構造をそこに見出す人も居る<sup>(74)</sup>。実際はこの著作は、この頃に美論を行ったクルーザ (Crousaz) やアンドレ (André) の如き体系的な方法で書かれてはいないし、脱線や反復も見られる。ただ、トイバー (Teuber) の云う様に、第一に芸術作品論、第二に天才論、第三に批評論と分類すれば、そこに書かれた全てを包含する事も不可能ではない<sup>(75)</sup>。我々は、この本がエッセー風であると共に、体系的関心も共存していると考え、教科書風なバトゥー (Batteux) の芸術論よりは体系的でないが、脈

絡のない単なる芸術文献 (Kunstliteratur) の一つよりは筋道を通す注意を払ったものだという事を認める事が出来る。

美術に関してこの外にデュボスは、大蒐集家クロザ (J.-Antoine Crozat, Watteau のパトロン) に協力して、『王室版画集成』を1729年に出して、その第一巻の『ローマ派の画家の略伝とその絵画とデッサンの記述』は、大部分が我々の美学者の手によるものとされている。

☆ ☆ ☆

デュボスは、1719年の末には、40名のアカデミー・フランセーズの会員の一人となった<sup>6)</sup>。彼はかって自分が揶揄した事もあるこの貴顕の士となり、やがて終身書記の地位につき、モンテスキューがアカデミーに入るのを阻むため議事を遅らせたりする事にもなる<sup>76)</sup>。1731年以前に、彼は出版物の国家検閲官ともなった。広くかつ正確な知識をもって色々の人々の役に立ち、権威ある重厚な人物となり、ヴォルテールにウアロー (Varron) と呼ばれた。

彼の最後の著作は、1734年に出版された『ガリアに於るフランス君主制の成立の批判的歴史』である。これは近代的な考証方法も用いた大研究であって<sup>77)</sup>、彼はそこで、フランス王はクロヴィスの後継者であるから、人民と貴族を支配する権利を正当に所有するものであるという事を証明しようとしている。その理由として、フランク族の王クロヴィスは、ローマ皇帝の同盟者であって、ガリアに於るそのほぼ代表者であったし、ローマはクロヴィスにガリア統治権を譲渡したから、民族移動でこの地に来たフランク族はローマから支配権を力で横奪したのではなく、クロヴィスは平和的に王座についたと云うのである。また、ゲルマンの一派フランク人達は、その族長に対して平等なものでもなかったし、専制ローマ皇帝の後継者であるフランク王に、フランク人民はかってローマに貢物をした様に税を払い服従する義務があったから、クロヴィスは土着のケルト系ガリア人民やガリアに残ったローマ人民や自分の部族フランク人を正当な権利をもって統治する事が出来るとする。従って、クロヴィスの末裔であるフラ

ンス王は、常に絶対主権を持つものであって、ただ幾つの特権だけが、教会と都市に与えられているにすぎないと云うのである。この理論は、蛮族による征服を重視するゲルマン主義に対して、ローマの権威に根拠を置くローマ主義と呼ばれるものである。ローマ主義からはこの時期に、フランスの貴族はフランクの將軍達の子孫であるとしても、その特権を要求すべきではないという主張になった。逆にゲルマン主義に立すブーランヴィリエ (Boulainvillier) 伯爵は、フランク人の平等性と自由を強調して、自分の階級である貴族の利益のためもあって、専制君主制を批判した<sup>78)</sup>。

この様な状況の中で、デュボスの理論は、政治に参加する事を主張せず、国内外の統一を進める王の絶対権力にはよく順応出来たが、自分達の階級の上に有力な階級がある事は嫌った、1730年頃のブルジョワジーの一つの理想をあらわしていると云われている<sup>79)</sup>。

☆ ☆ ☆

我々の神父は、1742年にパリで静かに没した。その数年後にはモンテスキューが『法の精神』を完成し、やがてディドロらが『百科全書』を企だてて行った。

註

- (1) Auguste Morel : Etude sur l'abbé DuBos, considéré comme diplomate, comme historien et comme critique. *Bulletin de l'Athénée du Beauvaisis*, t. III 1849, 1er semestre. Paris. 1850. Beauvais, 1851, in—8°.
- (2) Alfred Lombard : L'abbé DuBos, un initiateur de la pensée moderne (1670—1742). Paris, 1913. Slatkine Reprints, Genève, 1969.
- (3) 1696年2月10付の手紙。 *Choix de la Correspondance inédite de P. Bayle*, publiée par E. Gigas. Copenhagen-Paris, 1890. in—8°. P. 253.
- (4) Lombard, op. cit. p. 13, 15.
- (5) たとえば、あまりに殺人の多い血なまぐさい悲劇の作者を批判して、「何か意地悪な心の人、作者に人を遣わして、その死者のリストを求めにやる」と言う。DuBos : *Les réflexions critiques sur la poésie et sur la peinture*. 1755年版では、第1巻、



- 105ページ。以後、この著作への参照は同版に対するものとする。また、R. C. と略すこととする。
- (6) H. Sée : *La France économique et sociale au XVIII<sup>e</sup> siècle*. Paris, A. Colin Nlle édition 1969. Les chapitres 4, 5, 10 et 11.
- (7) Lombard, op. cit. p. 3.
- (8) *Mémoire pour la dame Danse ...*, 1743. P. 1. fol. Fm 4393. (パリ国立図書館)。
- (9) しかし、裕福な僧院の宗教人も、デュボスにとっては、その静穩の理想の一つにはちがいない。R. C. t. I, Sect. 22, p. 184
- (10) Lombard, op. cit. p. 17~18.
- (11) Antoine Adam : *Le mouvement philosophique dans la première moitié du XVIII<sup>e</sup> siècle*. Paris, Société d' édition d'enseignement supérieur, 1967. Du ch. I au ch. VI, p. 7~157.
- (12) Jacques Roger : *Les sciences de la vie dans la pensée française du XVIII<sup>e</sup> siècle*. Paris, A. Colin, 1953.
- (13) 1696年4月27日付の手紙。Gigas. op. cit. p. 261~2. 当時の錬金術、占星術、妖精物語、奇蹟などについては、Jean Ehrard : *L'idée de nature en France dans la première moitié du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, S. E. V. P. E. N. 1963. Le chapitre premier : Nature et merveilleux. ニュートンの考えも、デカルトに較ぶれば、ケンブリッジのプラトン主義によって強く色彩づけられ、神秘思想的であることについては、ch. III. §I. p. 127~9. Flammarion 社版, 1970年, *L'idée de nature en France à l'aube des lumières*, では、p. 77~9.
- (14) Lombard, op. cit. p. 63.
- (15) D. Mornet : *Les sciences de la nature en France au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1911. p. 19~25.
- (16) Lombard, op. cit. p. 19~20.
- (17) Id. p. 22.
- (18) Ibid.
- (19) R. C. t. I, p. 43~4.
- (20) Lombard, op. cit. p. 27~8.
- (21) Ibid.
- (22) デュボス自身は、論の終りの部分で、Langeloni が貨幣を用いて同じ想定をすでにしたこと、Bellori がそれを反論したことを知っていることを述べている。*Histoire des quatre Gordiens...*, Paris 1695. p. 119~120.
- (23) R. C. t. II p. 92~3, p. 532~5.
- (24) 1738年12月3日付の手紙。Lombard : *Correspondance de l' abbé DuBos*, 1913. p. 77~9. N°140.
- (25) *Histoire des quatre Gordiens...*, Préface.
- (26) Id. p. 116~117.
- (27) Lombard : *L' abbé DuBos*. op. cit. p. 29.
- (28) Id. p. 28.
- (29) Id. p. 29~30. cf. aussi *Lettre à Bayle* 1696, Gigas op. cit. p. 259.
- (30) Lombard, Id. p. 53~68.
- (31) Gabriel Bonno : *Les relations intellectuelles de Locke avec la France (d' après des documents inédits)*, in *University of California publications in modern philology*, 1955, t. 38, p. 37~363. 特に第2章, 第3章 *Les Relations épistolaires de Locke avec l' abbé DuBos*, pp. 156~163.
- (32) W. Gates : *The abbé DuBos—a harbinger of Locke in France?* in *French Review*, 1959, No 2.
- (33) Lombard, op. cit. p. 194.
- (34) Id. p. 74.
- (35) たとえばその一例として、Boisguillebertの *Détail de la France*, 1695 に反論している。*Lettre à Bayle*, 1696年2月10日付。Gigas, op. cit. p. 254.
- (36) Lombard, op. cit. p. 69~96.
- (37) Paul Hazard : *La Crise de la conscience européenne (1680~1715)*, Paris, Boivin, 1934~1935, 3 vols. in—8°.
- (38) Id. Première partie, ch. 1. Dans l' édition Gallimard, 1961, t. I, p. 15~47.
- (39) アカデミーで、デュボスの後に入ったデュ=レネル神父である。*Discours de l' abbé du Resnel*, dans le *Recueil des pièces d' éloquence...*, Paris, J.-B. Coignard, 1744, in—12, p. 93.
- (40) R. C. t. I, p. 153.
- (41) 1699年2月5日付の手紙。Dom Denis : *Les Autographes de Troussures*, Beauvais, 1912, No 69, p. 82.
- (42) *Le grand dictionnaire historique du Moréri*, tome 4 ème, 1759, p. 267A. この辞典のデュボスの項は、*Mémoire Danse* によっているので、変形された部分も多い。
- (43) Lombard, op. cit. p. 70~71.
- (44) Bernard Teyssède : *Roger de Piles et les débats sur le coloris au siècle de Louis XIV*, La Bibliothèque des Arts, Paris, 1957, p. 397~9.

- (45) この本は、実際にはフランスで印刷されたが、オランダ風書籍の体裁を整え、アムステルダム出版と記し、(実在せぬ)英語本よりの翻訳であるとし、英国女王への、英国下院議員J. Ch.なる署名をもつ手紙を前文に付け、またオランダ読者向けの出版者の言ものせている。
- (46) Lombard, op. cit. p. 109.
- (47) Mémoires pour l'histoire des Sciences et des beaux-arts, Mars 1704, article XXXVI, p. 418.
- (48) Lombard, op. cit. p. 108.
- (49) Jean Le Clerc : Bibliothèque choisie, Amsterdam, 1705, in—8°, t. VI, p. 322.
- (50) Lombard, op. cit. p. 110.
- (51) Warren Gates : DuBos and Motesquieu, an instance of prophetic Vision, in *Romance Notes*, 1960, Vol. I. No. 2, p. 127~130.
- (52) DuBos : Les Intérêts de l' Angleterre mal entendus dans la guerre présente..., Sixième édition, Amsterdam, Jean-Louis de Lorme, 1704, p. 210.
- (53) Lombard, op. cit. p. 91.
- (54) Id. p. 92.
- (55) Id. p. 110~117, 121~122.
- (56) R. C. t. I, Sect. 17, p. 135~8 ; t. II p. 138, 140, 148.
- (57) Lombard, op. cit. t. I. p. 145.
- (58) Id. p. 152 et 155.
- (59) Jules Ecorcheville : De Lulli à Rameau (1690~1730), L' Esthétique musicale, Paris, 1906, in—4°, Ch. III, La musique et la morale, p. 55~86. Louis Striffling : Esquisse d' une histoire du goût musical en France au XVIII<sup>e</sup> siècle, Paris, sans date (1912?), in—12°, p. 50~93. G. Snyders : L' Evolution du goût musical en France aux XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles, *Revue des Sciences humaines*, Fasc. 79, Juillet-Septembre, Lille, 1955, in—8°, p. 325~350. P. Hazard, op. cit. éd. Gallimard, 1961, t. II, 4<sup>e</sup> partie, Ch. III, p. 210~216.
- (60) Saint-Evremond, Lettre sur les Opéras, citée par P. Hazard, op. cit. p. 211.
- (61) Rapporté par Ecorcheville, op. cit. p. 57.
- (62) Montesquieu : Mes pensées, dans les *oeuvres complètes*, éditées par R. Caillois, tome I, p. 1021, N° 435 (119, I, p. 113), Bibliothèque de la Pléiade chez Gallimard, 1949.
- (63) Lombard, op. cit. p. 12.
- (64) André Fontaine : Les doctrines d' art en France...etc., Paris 1909, p. 202.
- (65) L' abbé Feuquières はデュボスに次の様な手紙を送っている。「貴殿は、ローマとそこにある美しい物に満足されてない様に見えますが、私にはそれが信じられませんでした……」。1701年1月16日付。Denis, op. cit. No. 155, p. 178. なお Taineも、イタリーでは、一定の感受性の欠如を見せている。
- (66) R. C. t. I, Sect. 39, p. 412~414.
- (67) 1698年8月6日付, Thoynard 宛の手紙, Denis, op. cit. No. 57, p. 62. Lombard, correspondance..., p. 32.
- (68) R. C. t. II, Sect. 18, p. 311.
- (69) Montesquieu, op. cit. p. 803. チロルの印象について。
- (70) Lombard : L' abbé DuBos, op. cit. p. 158.
- (71) ロンバルは、この著作の構想らしき手稿を見つけ、それは1710年頃のもので、刊行されたものとはかなり異っていると言っている。Id. p. 158, note (1), et p. 549, 2, A, I. 初版本 (tome II, p. 410) にすでに、1715年日付の Gravinaのある論文についての評が入っている。Eugène de Savoie 公の1718年6月1日付の手紙 (Denis, op. cit. No. 185, p. 206) は、この著作がもう出来上がったものとしての話しが記されているが、1717年の日付を、後世に誰かが1718年と書き換えたあとがある。
- (72) Eugen Teuber : Die Kunstphilosophie des Abbé Dubos, in *Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft*, 1924, XVII—4, p. 374. Paul Péteut : Jean-Baptiste DUBOS, contribution à l' histoire des doctrines esthétiques en France. Thèse de Berne, 1902, p. 24.
- (73) Lombard, op. cit. p. 195.
- (74) Id. p. 198~201. Teuber, op. cit. p. 376.
- (75) Teuber, Ibid.
- (76) Saint-Hilaire宛, 1691年11月23日付の手紙。Denis, op. cit. N° 2, p. 16~7. Lombard, op. cit. p. 165.
- (77) Lombard, op. cit. p. 389~401, 459~464.
- (78) Boulainvillier : L' Histoire de l' Ancien gouvernement de la France, 1727. L' Essai sur la noblesse, 1732.
- (79) Lombard, op. cit. p. 458.